

育てる

学校に限らず、それぞれの職場には人を育てるすばらしい上司がいます。

部下の話をじっくり聞く。考えを引き出し、よい点を褒め、組織における自らの存在価値に気付かせる。仕事は任せ、その達成の過程を見守り、相談に乗る、援助する等の柔軟な支援を粘り強く続ける……。

こうした中、部下にとって上司との対話は活力の源です。報告・連絡・相談は、もはや義務ではありません。対話を通して自らのよさや可能性に気付く部下は、新たな提案を行うために勉強します。自ずと視野は広がり、資質・能力が高まります。自らの意志で取り組むため、やりがいも増し、成果が実感できるようになります。

育てる上で大切なことの一つに、相手の意志、主体性が発揮されるような環境づくりがあります。これは何も、上司に限ったことではありません。学校、家庭、地域には、育てる立場の人がいます。いずれも、誠意をもって相手の話を聞き、関わりの中で自信を与え、生き生きとした活動を促すことが、本人と組織の力を高めることにつながります。相手の自己成長力を信じ、話をじっくり聞いて考えを引き出し、そして待つことを心がけたいものです。



財産とは

福聚山 慈眼寺住職 大峯千日回峰行大行満大阿闍梨 塩沼 亮潤

財産と言えば、主に金品を意味しますが、この「財」という言葉には、人間にとって貴重なもの、尊いもの、かけがえのない人という意味があります。うちはそもそも貧乏でしたので、小さい頃から母は、「あのね、母ちゃんはあるに与えられる財産は何もない。でも、どんなに大変な時でも苦しい時でも、母ちゃんが一生懸命に頑張っている姿。それがあんに残してあげられる財産だ」と、よく話してくれました。親が子に残してあげる大切な財産とは、苦しい時に「自分も頑張ろう」と思い出せる、親の生きる姿ではないでしょうか。

出典：「寄りそう心」 塩沼亮潤著（プレスアート）

※ 我が子に示す生きざまが、やがて指針となる。何と尊く、かけがえのない「財」でしょうか。